

## 「まちかど博物館」 —その存在意義と新たな活性化施策としての可能性—

Possibility of Machikado Museum

田畑 和彦  
Kazuhiko TABATA

(平成21年10月7日受理)

観光振興の鍵概念が「文化」へと移るなか、今、多くの市町村で注目されているのが「まちかど博物館」である。伝統の技や手仕事、コレクションなどを、仕事場の一角やその所有者個人の家で、所有者自らが館長となって、語るなかで、眺め、経験できる新しい形態の博物館がそれである。観光施設として新たに造られたものではなく、その地に深く根ざし生活を送ってきた人間の、いうなればその地の文化を体現する普通の人間の生活の場であり、仕事の場所がそれである。それはまさに民間の生きた博物館と規定できる。

館長となった人間は、人に見られ賞賛されることで、生き甲斐ややり甲斐、さらには当該地域への誇りを醸成するばかりか、館長会などで、新たな人と出会い、その技術に触れることで、技能向上への刺激を受ける。それはまた地域住民の顔を鮮明にするものであるが故に、地域の安全強化にも繋がっている。そればかりか、それは子供に地域を学ばせ、仕事を学ばせ、人を学ばせる良い機会ともなっている。高齢者がそれによって生き甲斐を持ち得れば、それは厚生行政にも正の効果を与えよう。

さらに、当該地域が「まちかど博物館」を通して、都市部とは異なる生活文化、仕事文化をより鮮明に打ち出せば、それは既存の観光施設、観光サービスと相俟って、当該地域の魅力、いうなれば、観光力を厚くするものであるが故に、新たな交流人口を導き、そうしてできた地域の賑わいは、当該地域の経済にこれまで以上の活力を与えよう。それによる所得の安定化は、地域中核労働者の域外流出を止めるかもしれない。日本の問題とされ、出口が見えないとされる中山間地域にひとつの光明を与えるものが、この「まちかど博物館」なのである。それに寄せる期待は大きい。

本稿は、その存在意義を検証し、新たな活性化施策としての可能性を探った。

### はじめに

今、中山間地域の新たな活性化施策のひとつとして、「まちかど博物館」が動き出し、注目を集めている。伝統の技や手仕事、コレクションなどを、仕事場の一角やその所有者個人の家で、所有者自らが館長となって、語るなかで、眺め、経験できる新しい形態の博物館がそれである。観光施設として新たに造られたものではなく、その地に深く根ざし、生活を送ってきた人間の、いうなれば、その地の文化を体現する普通の人間の生活の場であり、仕事の場所がそれである。それは民間の「生きている博物館」<sup>1)</sup>である。それ故に、予約が必要であったり、公開日などに制約が設けられているが、館長自らが語り部となる

ため、対象に対するその強い思いとともに、長年培った技、さらには対象物そのものを深く知ることができる。長年その地で培われた、その地域特有の技を、コレクションを間近でみることができるのである。

まちかど博物館は、このように、その地域に特有の歴史的、文化的資産、さらには個人が長年こだわりを持って収集したコレクションを、「まちかど」という気軽な名称のもと、誰もが気軽に見ることができるように、展示・公開することにより、まずは地元の人が地域の文化に触れる機会を増やし、郷土に対する強い誇りとともに、強い愛着を醸成することができ、一方、他地域の人にとっては、その地域に特有の歴史的・文化的資産を、自己とは生活を異にする人間の営みとして認識・受容できる機会となっている。それは地域の人間の営み全般を提示する博物館と言って相応しい。「高度な文化や収集品を施設に展示し専門家が管理運営、市民は受動的な利用という従来の博物館ではな」く、「既存の家屋や空間、自然もそのままに、住民が主体となって地域の暮らしを紹介する活動」が、まさにまちかど博物館なのである。それは「地域全体を面としてとらえ」た「町づくり」ともいえる<sup>2)</sup>。

既存の観光資源の周辺に、このまちかど博物館が配されることで、その地域の観光力は厚みを増し、観光客の滞留時間を今以上に伸長させるばかりか、それは新たな所得獲得機会となって当該住民に現れよう。また、そうした所得獲得機会の広がり、地域内外から新たな店舗の進出を導き、当該住民への新たな雇用機会の創出となって現れるばかりか、そうしてできた新店舗は新たなサービスの提供元となって現れる。

まちかど博物館は地域経済活性化のひとつの起爆剤たりうるのである。まちかど博物館を創設することで、館長が、また地域住民が、観光客と談笑する機会を得るだけでも、街は明るくなり、ひとつの勢いを与えよう。

他地域の人も、そこで与えられた新たな座標軸に触れることで、自らのこれまでの、そして現在の在り方を相対化できるのである。それに惹かれ、またそれを受容した人間は、新たなＩターン人口となって現れるかもしれない。

本稿は、今、注目著しいこのまちかど博物館に焦点を当て、その存在意義とともに、地域活性化施策としての発展可能性を探ろうとするものである。

## 1. まちかど博物館登場の背景

周知のように、中山間地域<sup>3)</sup>は農林業を基幹産業とするものの、傾斜地農地が多いばかりか、その傾斜度も大きく、しかも耕地そのものが点在するなど、その基盤整備の遅れも手伝って、機械化が遅々として進まず、その生産条件は極めて不利であることをその特徴とする。当然、農作業は捗らない上に、農業所得の安定も見込まれず、その地理的制約からその他就業機会に恵まれているわけでもなかった。これは子どもの教育環境の悪さと相俟って、農業の担い手を所得の安定した都市部へと走らせることになる。これに伴い、後継者不足は深刻となり、農山村の出産適齢女子人口の減少、さらには少産傾向と相俟って、農山村の高齢化率は一層引き上げられたばかりか、過疎化を生み、これがまた農業の生産活動の停滞を引き起こしているのである。それは現在のところ、耕作放棄地の増大となって現れているのであるが、一層その状況が厳しい林業と相俟って、なおも新たな発展のた

めの契機を見いだせないまま、長期低迷傾向を深めているのが中山間地域の実状である。それは困難の連鎖を断ち切ることができないままにしているのである。

しかし、中山間地域に真の問題は、そのような農林生産物の担い手の高齢化、さらにはその後継者不足からくる農林生産物の生産ないし供給の停滞という問題ではなかった。それは山村社会そのものの崩壊を意味する無人化傾向の進展とそれに起因して発生する環境保全の国際的遵守義務の不履行という問題にあったのである。生産の縮小などは輸入の拡大、さらには平地地域の生産力のアップなどによって多少なりともカバーすることができるが、環境保全に関しては、農山村に住民がいなくなれば到底不可能なことになるのである。

今、多くの市町村は、こうした現実を前に、今以上の人口の流動性を抑え、むしろＵターン人口を創り出すなど、定住人口を増やすべく、産業を振興・誘致し、多くは観光振興によって交流人口を増やすなど、後退著しい中山間地域に活気を与えようとしているが、ここでの重要なポイントは、まずは基幹産業を中心に据えた上での活性化であり、それが農林業である場合には、大規模、高生産性を否定するような価値体系を生み出していくことである。中山間地域にあっては、規模の拡大と高生産性をその基本哲学に置いてはいけないのである。生産コストが価格に反映する商品を作るのではなく、あくまで商品としてその価値が市場で認められる商品を作ることが肝要である。その価格がコストに全く拘束されない商品を作り出すことである。

さらには、農山村それ自体を、都会とは文化の位相が異なるところとして位置づけることである。これが次なるポイントとなる。農山村を捉える場合、それを都市と同じ文化水準でみてはならず、むしろ積極的に都市とは異なった面をもつ独自の生活文化、仕事文化の展開していく場所として捉え、創造していくことが大切ということである。農山村の認識は、農山村の現実をいかなる価値基準で捉えるかによっても大きく異なるのである。すなわち、高収入型の近代的雇用と近代的市民生活を享受することに社会の価値をおけば、山村はいうまでもなく後進地域である。しかし、豊かな自然と人間の関係や支え合う村人同士の風土、あるいは自分の腕を高めながら自分の仕事をつくり出していく暮らしを人間的なものととらえる価値基準に従えば、今日の山村は紛れもなく豊かな地域である。近代化した都市では実現できない生活の文化、仕事と労働の文化の形がそこにあるのである。農山村を訪れる人が後を絶たないのは、そこには明らかに都会とは異なる文化があるからである。農山村での生活は、それを明確に打ち出せてこそ、初めて積極的選択の対象となりえるのである。豊かな自然があり、その自然をうまく利用しながら保全する、大内力の言葉を借りるならば、「賢者の」すみかとしての山村こそ、都市の人々が訪れ、滞在を希望する山村になりえるのである。それは決して都市化された農山村ではなかった。むしろ、山村衰退の歴史はまさに山村近代化の歴史と符合するのである。その歴史的現実を重く見なければいけない。

まちかど博物館が提示するものは、この農山村の文化そのものである。長年その地で息づき、培われた生活の文化、仕事の文化、労働の文化である。その形である。

## 2. まちかど博物館が提示する「文化」

ここで本題に入る前に、まちかど博物館が提示しようとする文化について記しておきたい。

文化とは、ドイツのフェルディナンド・テンニースや、アルフレッド・ウェーバーが言うように、文明を「物質的なもの」と捉えた上で、文化は「精神的なもの」と位置づけ、その優位性を強調する見解や、フランスのように、もっぱら文明を「集団的な諸価値」とした上で、文化を「精神の生の個人的な全形式」とする見解など、様々に定義づけられるが、また、日本にあっては、梅棹忠夫のように、文明を機構、装置、組織、システムとした上で、文化をそれを担う人々の価値観とする見解など、文化人類学や比較文化論等、学問ごとによっても異なろうが、ここではジュリアン・スチュワードによる「文化とは集団の成員によって、後天的に学習され、成員によって共有され、世代を通して継承される行動様式と価値観」という見解を定義として採用することにする<sup>4)</sup>。以下、文化という場合、ジュリアン・スチュワードの言う文化を指す。

我々人間は、ある特定の社会の中で生活を送っているが、日常生活を送るに当たっては、共通の価値観に裏付けられた行動様式をもって当たっているということである。この価値観と行動様式が文化である。

その意味では、地球上の人類のすべてが何らかの形の文化を持っているのであり、特定の社会ごとに文化はその様相を違えているということである。民族文化、地域文化など、文化はそれぞれに個性を持ち、特殊性を具えているのである。都市部には都市部の文化があり、農山村には農山村特有の文化があるのである。農山村の人々が後天的に学習し、共有し、世代を通して受け継がれた行動様式と価値観を、農山村の文化というのであり、それを「まちかど」という名のもとに紹介するのが、まちかど博物館の使命である。以下にその具体的なものを追ってみることとする。

## 3. まちかど博物館の認定基準—三重県の場合—

三重県はまちかど博物館の先進地域である。インターネットでまちかど博物館を検索すると、真っ先にヒットし、多くの情報を与えてくれるのがここ三重県である。その三重県生活・文化部文化振興室がまちかど博物館を認定するに当たって、認定基準として設けているのが以下のものである<sup>5)</sup>。

三重県はまず「対象」と「条件」とに分ける。対象は、さらに、「コレクション」、「伝統工芸」、「モデルショップ」、「建物」に分けられ、それぞれに以下の条件がつく。また、「条件」そのものにも新たな枠組みが与えられている。

### 【対象】

- ・コレクション…個人が長年かけて収集したもので、非営利性、一貫性があるもの。
- ・伝統工芸 …地域の伝統に根差し、歴史、伝統、文化性の高いもの。また、製造工程の見学ができるもの。
- ・モデルショップ…伝統に根差し、珍しいもの、貴重なものを展示しているところ。

商品知識が豊富で、まちかど博物館の館長としてふさわしい人のいるところ。地域の文化の香りがする店。

- ・建物 …独自の建築様式を有し、見学できるところ。

#### 【条件】

- ・人、もの、場所があること。
- ・熱意を持って説明できる館長がいること。
- ・まちかど博物館マップへの記載や、統一サインの設置が可能であること。
- ・公序良俗に反する展示内容でないこと。
- ・観覧希望者に公開できること（公開日は毎日でなくても、予約者のみの公開でも可）。

## 4. まちかど博物館のリスト

### (1) 「三重のまんなかまちかど博物館」

こうした基準の下、三重県では、各まちかど博物館（「桑員まちかど博物館」、「いなべまちかど博物館」、「鈴鹿・亀山まちかど博物館」、「四日市地域まちかど博物館」、「三重のまんなか・まちかど博物館」、「松阪・紀勢界限まちかど博物館」、「伊勢まちかど博物館」、「伊賀まちかど博物館」、「東紀州まちかど博物館」）の推進委員会が主体となり、まちかど博物館を認定し、それをホームページで立ち上げている。認定され、動き出している博物館は全部で396館である。

以下ではこの中のひとつ、「三重のまんなかまちかど博物館」のリストを紹介する<sup>6)</sup>。「三重のまんなかまちかど博物館」は、三重のまさに真ん中地域にある津市、松阪市嬉野町の2市をエリアにするが、津市に限っては、津市、津市（河芸エリア）、津市（芸濃エリア）、津市（美里エリア）、津市（安濃エリア）、津市（久居エリア）、津市（一志エリア）、津市（白山エリア）、津市（美杉エリア）の9つに分けられる。松阪市は嬉野エリアのみである。

さて、津市のそれであるが、以下のものがまちかど博物館とされる。

津市	
1	三重の蝶・博物館
2	生命を育むやさしさの博物館
3	鉄道おもちゃ博物館
4	今のエネルギーがうったえるギャラリー博物館
5	昔ながらのアンティーク博物館
6	ひと昔前の我楽多博物館
7	時を伝える微笑み博物館
8	甘いものおまかせ博物館
9	時代を写したこだわり博物館
10	伊勢木綿

11	寒紅梅地酒博物館
12	伊勢型紙工房いわさき
13	航空博物館
14	我楽多博物館
15	能面博物館「聒々庵」
16	わら細工館「諏訪庄」
17	建築道具館
18	アトリエ・テリー（銀粘土とマンドリンの工房）
19	タタミ工芸館
20	ひょうたん工房江尻
21	プロレス・マスク・ミュージアム
22	あのつギャラリー
23	家具工房
24	岩田工房
25	まちかど子ども博物館あの津っ子
26	古泉博物館
27	刻字工房「有石」
28	わら細工館
29	夢家
30	小さな昭和と武士博物館
31	大当たり狸御殿
津市（河芸エリア）	
1	水石の博物館
2	人形工房 愛三
3	樹楽（KIRAKU）
津市（芸濃エリア）	
1	伊勢別街道講札博物館
2	安西焼物博物館
津市（美里エリア）	
1	ふるさとの蝶博物館
津市（安濃エリア）	
1	酔煙文庫 生活資料館
2	焼きものの博物館
3	もくざい工房森谷
津市（久居エリア）	
1	人形と絵画の展示館

「まちかど博物館」

2 なつかしの下駄屋博物館 3 昭和発“くつ”博物館 4 “初日”酒蔵博物館 5 久居藩（藤堂家五万三千石）& 久居鐔博物館 6 鳥の工房「鴛鴦窯」 7 世界蛙御殿 8 あんてい〜く 蔵樹
津市（一志エリア）
1 縄文博物館 2 大槓と地下室のある旧家 3 農機具・養蚕・民俗博物館（JA三重中央郷土資料館） 4 友情から生まれた谷川博物館 5 小山工房 6 日本民家の再生「備伊巢」 7 絵画のある博物館 8 大正和の家
津市（白山エリア）
1 古物展示館 藤本 2 夢グラス白山 3 木目込み人形と書の展示館
津市（美杉エリア）
1 陶素人館 2 岩ひば栽培館 3 野村青空工房 4 そば道場清貧庵 5 かじや木の工房
松阪市 嬉野エリア
1 倭姫・嬉野酒地酒博物館 2 ひょうたんあそび 3 伊勢型紙扇子工房 西村 4 船の模型博物館



(2) 「いなべまちかど博物館」

同じ三重でも、いなべまちかど博物館はジャンル別に博物館を紹介する。以下の通りである<sup>7)</sup>。

ジャンル	地 域	博物館名	説 明
職人	北勢町 大安町	仙松かじや 茶室 竹細工博物館 伝統工芸博物館 村のかじ屋博物館  畳工芸博物館	昔ながらの諸工程の公開 子安庵 4 年半の歳月をかけ完成した茶室 竹細工製品の作業工程の見学 建具組子の公開 今も昔の技法を重んじた生涯使える本物の道具などを展示 畳の歴史を見てきた職人として畳を展示
美術	北勢町  大安町 藤原町	なでしこの家・瞿麦堂  手作り絞り博物館 創作絵馬博物館 布夢庵（ふむあん）	松尾芭蕉や山口誓子などの句碑、道標の拓本などの展示 有松絞り手作りの作品などの展示 絵馬（他 書絵画）の展示 藤原の自然の草木・花の命を糸や布に染め上げた草木染めなどの展示
自然	北勢町  大安町 員弁町 藤原町	員弁川石の館  青川自然石博物館  ハーブ園博物館  いなべ古代魚博物館  員弁川さかな館	佐治川や瀬田川など主要河川で採取した石の展示 青川溪谷で採石した灰ばん石榴石など天然記念物の展示 日本ハーブ協会が県内唯一の認定校として「ハーブ塾」を開講 合成樹脂の古代魚レプリカや各種資料の展示 員弁川に生息する淡水魚の展示 ミニ水族館
資料	北勢町  大安町  員弁町 藤原町	プチ鉄道博物館 藤田Nゲージ鉄道館 軽便鉄道博物館 貨物鉄道博物館  大正図書博物館  いなべ笑学校  史学庵	鉄道に関するいろいろな資料を展示 40編成のNゲージの展示 軽便鉄道に関する資料を展示 世界初の貨物専門鉄道博物館 戦前の貨車などの展示 桑名や員弁の歴史書「伊勢輯雑記」や天台宗や大蔵経等の書物展示 落語に関する書物と再生装置、落語ライブラリー収録物の展示 「山と人間とのかかわり」をテーマに県



			史や北勢の市町村史の資料展示
陶器	大安町 藤原町	北山窯博物館 幸峯	自力でログハウスを建て、ギャラリーとして自分の作品を展示 聖宝寺などの名所をかたどった壺などの陶器類展示
木工	北勢町   大安町	手づくり工芸博物 館木工館コンドウ 森の広場博物館  おきもの工芸館  木工ろくろ工房 木型工芸博物館	ケヤキやヒノキの廃材を利用して制作した法隆寺や石取祭車、神輿などの展示 館長自作の詩を彫刻した木工作品の展示 北勢の山で採れる杉や雑木で作った木工製品の展示 館長自作の廃材を再利用し灯籠を形取った置物の展示 木のぬくもりを感じるろくろ製品の展示 匠の業を受け継いだ鋳型の木型を展示
骨董	大安町 藤原町	骨董品博物館  ギャラリー白瀬の郷 立田ふるさと館	銅器や漆器、武具、はては女性の装飾品まで様々な骨董品の展示 約1,000点の故郷にまつわる骨董品の展示 大正、昭和に渡る生活用品骨董類の展示
工芸	北勢町	あしはや  昔の器と剥きもの館  和菓子博物館松寿園	木型やせんべいの焼型、鉄道模型などの展示 大正から昭和初期にかけての器や漆器などの展示 和菓子作りの木型の展示
レトロ	北勢町	夢屋	古き良き時代のビートルズやエルビスプレスリーなどに関わる逸品の展示
芸術	北勢町	マジッククリエート ひまわり	50年間をマジックアーティストとして活躍し、卓越した数々のオリジナル品と古い道具から新しい道具の展示

いなべまちがと博物館は、「職人」「美術」「自然」「資料」「陶器」「木工」「骨董」「工芸」「レトロ」「芸術」とジャンルを10に分け、そこに地域、さらには博物館を張っているのがその特徴である。

## 5. まちかど博物館の運営状況

さて、静岡県川根本町にその事務局を置く大井川観光連絡会は、静岡県川根本町、さらには島田市をその構成団体とするものであるが、「人口減少や高齢化の進行等による地域活力の低下、中山間地域の活性化に向けた観光資源の必要性」、さらには「開設される空

港・高速道路の活用」等を背景に、「空港、高速道路の整備を生かした奥大井観光振興プロジェクト」を立ち上げ、それが国交省の「平成20年度の地方の元気再生事業」のひとつとして採択されるに至った。

当連絡会は、目指すべき地方再生の一環として、「エコミュージアムの考え方を取り入れた地域まるごと博物館の形成」を推進するが、その重要な一拠点として位置づけているのがまちかど博物館である。すなわち、まちかど博物館をサテライト的に地域まるごと博物館の中に落とすことで、観光力のアップを図り、交流人口の増大、さらにそれに派生するメリット等、地域経済の活性化に寄与させることを考えているのである。このプロジェクトは、すでにその下部組織である「川根本町まちづくり観光協会」が中心となって動き出している。

以下は、この川根本町まちづくり観光協会の主導のもと、平成20年10月6日に設立された「まちかど博物館設置調査委員会」<sup>8)</sup>が、2008年10月21日と22日に、先進地域である三重県いなべ市と津市、さらには同年の11月11日と12日に、大阪市平野区とを視察して回ったその調査結果である。我々「設置調査委員会」は、まちかど博物館が有する観光資源としての有用性を検証しようと試みたのである。

## (1) 三重県

### ① 概観

全県的にまちかど博物館を持つのは三重県だけである。まちかど博物館それ自体は、もともと大阪と三重県の伊勢に存在し、特に伊勢にあっては、民間によって運営されていたが、そこでの成功が県推進の「歴史街道構想」とも絡み、三重全県に広まることになったという。コレクションを見るだけでなく、館長の話聞くのも、良い思い出づくりになるとのスタンスがそこに貫かれていた。

三重県のいなべでは、まちかど博物館の名を刻んだ看板とはっぴが自主的に作られている。のぼり旗などは1枚目は無料だが、2枚目以降は実費ということであった。また年に1度、館長会が開かれ、エリアの館長が一同に集まるが、2名までは県により交通費が支給されるという。県は年2回実施される観光交流会に出店する費用も支援するという。それ以外は、「立ち上げ時に、支援は最初だけ」と言っている。市民からの特別な要望はないそうである。それでも、県の広報誌では個々のまちかど博物館を紹介するなどしているという。博物館の認定それ自体は各推進委員会に任せ、県は県民センターとして関わっているのみである。

桑員まちかど博物館は、「まちづくり・地域づくり」に乗ってできた博物館である。三重のまんなか・まちかど博物館は、ウォーキングを実施する近鉄とタイアップするなどして、その内実整備に力を注いでいる。伊勢まちかど博物館はもともと始めていたので、県はまったく関与していないという。東京の墨田区にまちかど博物館があって、それを参考にしたといわれる。伊賀まちかど博物館は、プール金を有するほど豊かなまちかど博物館であり、博物館の活動に当たっては補助金を支援するという。この伊賀まちかど博物館と伊勢まちかど博物館は、観光を全面に打ち出す博物館であり、それ以外のまちづくり・地域づくりを中心とするまちかど博物館とは一線を画する。東紀州まちかど博物館は、東紀州それ自体が熊野古道で盛り上がりなかったもので、寂れているという。

以下は、いなべ市、津市それぞれで、ヒアリングを実施して浮かび上がったまちかど博物館の姿、その特徴である。

## ② いなべまちかど博物館

いなべでは「町をこれ以上寂れさせたくない」との強い思いから、まちかど博物館は推進されたという。博物館それ自体の出入り、すなわち入れ替わりはあるが、「入れてもらえませんか」と自薦で増え続け、現在では39館を有するまでになっている。事務局は県に存在する。いなべでは、ひとつの約束事があり、博物館と名乗っている以上、儲けてはダメとのスタンスをとる。体験学習も存在するが、定価を付けてはいけないという。

最初の仕掛け、呼びかけこそは、県主導で、桑員でのパンフレットづくりからスタートしたが、これでは括りが大きすぎたばかりか、両市ではその目的が大きく異なることから、分離して実施することになったという。すなわち、いなべでは趣味でやろうとする人が多かったが、桑名では博物館をビジネスに結びつけて実施しようとする人たちが多かったという。すべての予算が後者に使われてしまう傾向が強かったことから、いなべでは商業ベースとの分離を考え、袂を分かつことにしたという。桑名の方も、実際、県が1年で手放し、予算が付かなくなって以降は途端に抜ける人が増えたという。いなべでは商売魂が出ないようにしようという、半ばボランティアに近いのを、その博物館の特徴とする。

さて、博物館の実際だが、これは上もなければ下もないという。高尚なコレクションを展示するところもあれば、そうでないところもあるという。実施するに当たっては、家を上がって行う場合もあるために家族の同意は絶対に欠かせないという。変わり者を探すことが成功の一要因であるとする。

現在のところ、活動的にやっているのは半分の20館くらいだが、それでも、館長の声としては、「やって良かった」との声が多いという。その年齢構成は、上は89歳を筆頭に、80代4名、若くて45歳くらいだが、まちかど博物館はやりがい、生き甲斐に繋がっているという。ある館長の場合は、子供のために御興を作ってあげたのが博物館を立ち上げるきっかけとなり、現在では色々なところに自らの作品を貸し出すまでになっている。「見られることで張り合いが出る」とのことであった。「うれしいばかりで、困ったことは何もない」という。「むしろ出張に行くとは展示の仕方など勉強になることばかりである」という。その声は明るい。

地域住民の声としても、「あんなことをしていたの」とその存在を改めて認める声が多いとのことであった。それ故に、館長サイドも、最初は市民に知らせるためにやっていたようなもので、認知されて以降は、新聞・雑誌等のマスコミを使って、外に向けてやり始めたという。

現在では、小学校の体験学習を支援するまでになり、行政の評価も高く、いなべ市からは本年度25万円の補助金を得たという。

広報としては、今も、アルバイトニュースの巻頭で2軒ずつが紹介されているという。スタンプラリーに当たっては、観光客の要望で、館長自らが次の博物館を紹介・案内するケースもあるという。自らがどのジャンルに所属するかという所属ジャンルは、館長自らが手を挙げて決定されるという。

### ③ 津まちかど博物館もりあげ隊

津市では、主として、津まちかど博物館もりあげ隊の会長であり、「ステンドグラス夢グラス白山」の館長でもある堀口健二郎氏に質問をした。堀口館長は次のように言う。「ステンドグラスは近くて遠い存在。どこでどのようにして作っているのか分からない。ステンドグラスを広めるために、見学を兼ね、博物館とした」とのことであった。ここでのまちかど博物館は、自らの仕事の理解を深めるための重要なツールとして位置づけられていた。

堀口館長曰わく、「県が主導した方が、金の心配をしなくて良いからメリットがある」が、その県は「ある日突然見放した」という。「それでも伊勢などはもともと講が存在した故に、立ち上げに当たっては何の行政支援ももらえなかったところ、津は4、5年間、県に面倒を見てもらい、ある意味、ぬるま湯体質のなかに身を置いていた」という。以後、県に代わって、市が面倒を見てくれたのかということ、そうではなく、「市は県と仲が悪く、その支援体制はない」とのことであった。すなわち、「市は県が立ち上げたことと冷たかった」という。それ故に、「当初、津市だけが市が窓口になっていなかった」そうである。「今でこそ、窓口になってくれているが、当初は協力的ではなかった」という。「前向きに検討しますとのかけ声ばかりで、余分な仕事はやりたくないとの空気が支配的であった」。「しかし、これも行政の担当者のやる気によってまったく異なる」という。

以上のように、県が見放して以降は、「もりあげ隊になると自腹を切らなくてはならない。自分たちで金を払ってまで続けたくない」との声もささやかれ、「金を徴収すると、辞めるところが続出してしまうのではとの危惧もあったが、それでも辞めるところは少なかった」という。「それだけ博物館に意義や魅力を感じている証拠である」とのことであった。博物館にすることによって、「お客さんが来るというよりも、館長同士の話し合いに触発され、自らの技能が向上する」ところに堀口氏はメリットを見出していた。また「クラブ活動のような懐かしさも覚える」という。そもそも「他人の作っているものに感動を覚える」ということであった。「正直、来館者は少なく、現在は、当初の目的とだいぶずれている」というが、それでも、「公のものに対してお金を払っているという意識があり、同じ市内にいて知らなかった人、魅力を発見できた」という。それは「自らの人生の見直しにもなったし、人生は一直線ではないことへの確信。自らの生き様を見せられることに繋がった」という。博物館は「いろんな人の考え方を聞ける場所」ということであった。それ故に、「館長の声としてはやってよかったとの声が多い」。「メリットは館長の腹ひとつである」という。「とらえ方次第」であるという。今では「県立の館長という意識を持っている」とのことであった。「県が立ち上げたのだから、そういう意識でやった方がよい」という。また「まちかど博物館に参加しているということが、ひとつの信頼を形成するまでになっている」という。

館数は、現在のところ、65館から72館、さらには69館と変動を見せるが、高齢でなくなってしまうことがその推移を形作る一大要因であった。「館長の年齢層は高く、平均すると50代半ばから60代である」という。「最高は85歳」である。そうした事情も反映してか、年1回開かれる館長会にはその半分の30館くらいしか参加せず、また顔を知らない館長も存在するという。しかし、このような場合には、自らが館長巡りをやって会いに行くという。ヒアリングに同席して頂いた津まちかど博物館もりあげ隊総務担当の鈴木郁子（なつ

かしの下駄屋）さんも次のように言う。「事務局は時に重い負担に感じることもあるが、自らの組織をええとこ探し委員会と名付け、ええ人、ええもの、ええ場所を探すことに力を入れる」という。「誰が主導者になるかによっても大きく異なる」とのことであった。

「津市はほとんど趣味でやっている人ばかり」で、「立ち上げに加わった人は協力的だが、その他の人は協力的とは言えない」という。それでも、「まちかど博物館は気軽に入れて、子どもに疑問を持たせる良い機会になる」とのことであった。「町の秘密を探そう」などとすると良いという。高い教育効果が望めるとのことであった。最近、近鉄が協力してくれるようになり、ウォーキングラリーを実施するなどしている。

当調査委員会が立ち上げに当たってのアドバイスを求めると、「存続を考えて、立ち上げた方がよい」とのアドバイスを受けた。①「文化とは何か、本物志向でないとダメ」という。本物志向、これがキーワードであるという。「安ければ良いという時代ではもはやなく」、「歴史的なものを入れないと深みが出ない」とのことであった。

さらに、存続に当たっては、②「やる人の熱意、強い思い入れが重要であり、新しい人を発掘して、入れ替えないとダメ」とのことであった。「博覧会やイベントは重要であり、それらをやった後の方が人が集まりやすい」という。

③「ガイドブックの発行も重要であり、これは行政の支援でやって欲しい」とのことであった。「行政は『文化振興』や『観光振興』、さらには『教育振興』ごとに様々なパンフレットを作成するが、是非とも一本化して欲しい」という。

また、④「うまく回れるようにモデルコースを作れ」とのことであった。「ウォーキングイベントなどをやればいい」という。「津市の場合、大阪から来る人が多く、空気が良いから、田舎くささが良いから来る」とのことであった。

そして最後に、⑤「館長になるということは、生きがいを自分自身で作ることに繋がる。館長のもの、コレクションではなく、生き様を見せる、そういう意識が大切」とのことであった。「仕事人間であった人に新たな見本を提供する。自分も展示物なんだ。そういう意識が大切」とのことであった。「こうしたことを館長の候補条件のひとつに加えてみればよろしいのでは」との助言があった。

博物館に対する周辺住民の反応を尋ねたところ、「周辺住民は別に何も言わない」という。「長いこと車が止まって苦情がいくつかあった程度である」。「むしろ、周りの人に認識してもらえている」という。「町角で聞かれるから、自分も勉強して、自分の知らないことも知った」という。立ち上げに当たっては、「伊賀が参考になる」という。

上述、総務担当の鈴木さんが最後に言った、「我々のしていることは小さいが、それが日本を支えていると思っている」という言葉が重く響いた。

#### ④ 小活

三重県にあっては、上記二市しか視察していないために、その結果を一般化することはできないが、それでもそれら二市においては、主たる観光の核が存在しないために、またまちかど博物館それ自体を観光振興の重要なツールに置いていないために、まちかど博物館が観光の厚みを形成するものとはなり得ていなかった。博物館ひとつひとつの魅力が弱く、なおかつ少なからぬ距離を保って点在しているために、集客の上では強いものとはなり得ていなかった。まちかど博物館はもともと観光の核を中心にサテライト的に配置され



ることで、観光の厚みを形成するものであり、それ自体で高い集客力を持ち得るものではない故に、観光の核が不在ななかにあってはこうした現実避けられないことかもしれない。これは逆にいうと、奥大井のような観光の核がいくつもあるところでこそ、有益なものとなり得るということである。

しかしながら、観光の面では高い効果は望めなかったものの、館長となった地域住民の生きがいややりがい、さらには関係性を密にすることによる安全性の確保など、地域力を底上げするという点では高い効果を発揮し、地域の活性化に正の効果を与えるものであった。今さら指摘するまでもないが、館長としての存在承認は高いモチベーションとなって現れていたのである。注目され、賞賛されることで、館長は大きな喜びを享受し得ていた。その強度を増す少子高齢化社会にあって、高齢者の生きがいづくりに繋がるこれは、その原資がままならない医療保険制度のなかにあって、有益に働くものであろう。

## (2) 大阪市平野区・平野町ぐるみ博物館

続いて、調査委員会は、大阪市は平野区、「平野町ぐるみ博物館」にヒアリングに赴いた。平野では「町ぐるみ博物館」である刀剣師さんや呉服・悉皆<sup>9)</sup>屋さんの仕事場、さらには大通りに面し、年代物のティーカップや洋食器、コーヒーマルを展示するコーヒESHOPP屋さんに話を伺うことができた。それ以外にも、木型で菓子を作る和菓子屋さんが存在したり、幽霊博物館も「町ぐるみ博物館」のひとつであった。

そうしたなか、我々がその詳細を尋ねるべく、マイクを当てた相手は、「平野の町づくりを考える会」の事務局を預かる全興寺（せんこうじ）住職・川口良仁（りょうにん）氏である。以下は良仁氏の言葉を中心に拾ったものである。

### ① 博物館を設置・運営するに至ったいきさつ

まず、町づくり委員会が出来上がったのは、1980年に八角形のユニークな駅「南海平野駅舎」が無くなってしまふことをその契機にするという。駅舎保存運動が展開されたのがその始まりであった。

この保存運動はまもなく失敗してしまったが、住民主体の動きはそこに大きな花を咲かせ、1983年の「景観協約運動」や「町めぐりツアー」、「たそがれコンサート」となって結実することになる。そして、併せて、駅舎の解体した部品なども再び集められることになったという。

その後、町並総合調査が1986年に実施され、1989年には「ひらのオモロイはなし」、1994年には「平野おもろいことば」、1995年には写真集「おもろいで平野」など、平野にまつわる記録出版が相次いで出されることになる。

そればかりか、この間には、1985年に「含翠堂講座」が、1987年に「平野連歌」の再興が、1992年には「御田植神事保存会」が立ち上がるなど、平野の伝統継承にその力が注がれたという。

町ぐるみ博物館ができたのは、こうした動きがあったその後である。それは7館から始まったという。「平野の町づくりを考える会」と他の会との違いは、あくまでも住民主体で、行政、商工会とは離れて実施したところにその特徴がある」とのことであった。「それ故に補助金も得ていない。お金を得るようになったのは、1999年に町ぐるみ博物館の数が

100となり、それに伴い町並整備の協議会ができてからのことである」という。すなわち、住民主体の町づくりに、後から行政が参加するという形を取ったのである。会長である呉服・悉皆屋を営む松村長二郎氏も「町づくりの協議会の中に大阪市を入れてあげているという意識が強い」と語る。「ケチを付けたら、あんた来んといてや」と言うのだそうである。松村氏は「固い頭の行政マンの頭を柔らかくした」とそれまでの熱い思いを語ってくれた。「主導権はあくまで住民が持つべきで、行政はお手伝いの意識でやれ」とのことである。1993年に7館から始まった町ぐるみ博物館は、2001年現在、「町ぐるみ博芸・博物館」と名称を変更し、活動するという。

さて、江戸の商家を思わせる伝統的家屋が建ち並ぶ歴史ある町、それが平野である。「朽ちていく町だが、残された路地などはその魅力を今も作る」。そうした優れた景観が、住民のもともと主体的であった姿勢と相俟って、景観協約運動を展開させ、創建当時のお店に戻す、そんな努力をさせたのである。松村氏の言葉を借りれば、「12階建ての建物ができて、押さえられなくなってしまってから、町並み条例、さらには、強制力はないものの、町並み作法5つの心得を作った」という。全興寺住職の良仁氏も「レトロは大切である」とのスタンスに立つ。それは「人間と機械が触れあった良き時代」であり、「時代は戻る」という。電線を地中化したのもそのためである。そんななかで開催されるガレッジセールは、まさに人と人との交流の場であり、活気にあふれるという。もともと武士階級がおらず、商人が警察権や裁判権など、高い自治力を持っていた平野ゆえに、それがDNAとなって住民の中に受け継がれ、こうした主体的姿勢に繋がっているという。

さて、博物館の年齢構成だが、「下は30代から上は76歳までと幅広い」。「始めて26年経つが、会員登録はしないから、その都度の参加という形を採っている」のだそうである。また、「世代交代や次の若い人を育てることは考えていない」という。「組織ができると、人事に70%の力が取られる故に、組織は作らない」という。「ただ第3金曜日の7時から会議が開かれるだけである。20人くらい集まるが、コアで動くのは、15人くらいである」。「寺だけどほろ酔いサロンという感じである」と住職は笑う。「とりあえず行くかという感じである」。

## ② 実際の運営

今も様々な活動を展開している「平野の町づくりを考える会」だが、同会は最初から「町づくりを観光的にしないとのスタンスに立っていた」。「観光で人を呼ばない。住んでいる人自身が町のことを再確認する。それが町づくりだと思っている」という。

「誰のための町づくりかと問われれば、それはまずは自分が楽しく住むためと答える」のだそうである。「個人が基本だと思っている。しかし一人では何もできない、そこで他者を含めた視点、いうなれば人間という視点、さらには環境・自然との共生という視点を持ってくるのだという。町ができて人が集まるのではなく、人が集まって町ができる、そんな視点が重要」とのことであった。

「町づくりはあくまで人づくりであり、それは死に甲斐のある町づくりでもある」という。「活性化の経済的効果を生むことは一切考えていない」とのことであった。「光を見せる観光ではなく、歴史・文化、人との繋がり、音・匂い、雰囲気という重層空間の上に醸し出される『感風』を感じて欲しい」という。「町を構成している見えないものを感じて



欲しい」とのことであった。

「町づくりで重要なのは、目に見えるものよりも、目に見えないもの、年月の積み重ねで醸し出されるものが重要なのである。目に見えないものを育てていくことが大切」という。「それはまさに人の繋がりであり、それこそが町を形成する」とのことであった。「こうした視点が欠落すると経済効果のみが全面に出てきてしまう」。「町の魅力づくりは、長い目で見ないとダメ」とのことであった。

それ故に、自分たちも、町づくりにはこだわる4本の柱を置いているという。「①まずひとつは、町並、景観という『ハード』であるが、②次にはコミュニティや文化に象徴される『ソフト』、③続いては、町全体を『アート』にすること、④そして伝統をいかに受け継ぎ、いかに次の世代につなげるかという『伝統継承』の4点がそれぞれである」。「自然と歴史こそ、次の世代に伝えるものである」とのことであった。

そのためにも、「町めぐりは非常に重要で、まずは町を知ることが根本になる」という。上記「昔話、昔の写真、昔の言葉、酒・こんにゃくなどの昔の名物などを今に蘇らせたのもそのため」とあるという。

「そもそも大阪では、①『おもしろい』ということが町づくりの第一原則である」という。この点は呉服・悉皆屋の松村氏も強調する。「遊び心が大切」とのことであった。「義務や責任では長く続かない」という。

「次は②『いい加減』が大切。いい加減さのおもしろさが良い。会則、会費、事務がないのもそのためである。町にコンサルトなんか入ると、成功事例しか持ってこない。無難なものしか持ってこない。人任せにしたら絶対にダメである」という。「おもしろいのは住民しか知らないのだから」。

また、行政や商工会など、しがらみから距離を置くことも大切である」という。「補助金を入れると、パンフレットに電話番号を入れてはいけないとか、制約がある」という。だから断り続けてきたとのことであった。

「それでも、時に、③『人のフンドシ』で相撲を取る、いわゆる補助金をもらうことも大切である」という。「町並などは専門家でないとダメ故に、その時は大阪市に見てもらうなど、平野も人のフンドシで相撲を取った」という。

いずれにせよ、「町ぐるみ博はあくまで内向けのもの。7-15カ所と増えたり、減ったりしているが、民間の施設を開放してもらうことで、博物館にした」経緯を持つ。「建ててもらった訳ではない。会合も15年間開いたことがない。あるのは事務局のみである」という。

「一番の特徴は観光化されていないので、駅に降りても、パンフレットも何もない。各博物館に置いてある白黒のパンフレットだけである。だから、皆迷う」という。しかし、「それが狙いである」という。「迷ったら、地元の人に聞いてという。町のことを知ってもらうことが目的だから、そうしてもらう」とのことであった。

しかし、「15年経っても地元の人に知ってもらうのは困難なこと」であるという。「それでも、町民はいつも尋ねられるから否応なく知ることになる」のだそうである。

「大阪市も、ガイドを養成しませんかと言ってくるが、いつも断る」とのことであった。「観光化すると仕掛けが見えるからである。普通の町がおもしろい。町ぐるみ博は住民の自発的意志がないと絶対にダメ」という。「頼まれてやっていると、それが態度に出てし

まう」からである。「住民のなかの運動の一環と捉えないとダメ。自発的にやっていないとすぐに伝わる」とのことであった。

「町がおもしろい、博物館がおもしろいというのは、それは館長のおもしろさである。自分だけ、おもしろいところ見つけてきたでと、その人が案内人になり、人を連れてくる」。「最近、不景気だから、地元の再発見はおもしろい」という。

「町ぐるみ博物館は簡単にできるが、落とし穴もある。十分準備期間を設けた方がよい」とのことであった。また、お金を取らない方がこちら側が主導権が握れるという。お金を取ると、「お金を取ってこんな所と言われかねない」からである。

「統一してやるのは、第4日曜だけで、それ以外はおまかせ」であるという。「年一回の所もある。年一回で来るのかなぁと思ったが、だからこそ来た」とのことであった。

平成8年に、「あなたも館長にならないか」と呼びかけたところ、100できたという。「もともと平野は主体的に動くという土壌があり、住民が主体的に動いていたからこそ、行政が行動を共にしたいと声をかけてきた時も、条件を出せたのである」。全興寺住職の川口良仁氏も、呉服・悉皆屋を営む松村長二郎氏も、その言葉は共に力強い。

### ③ 運営していくなかで浮かび上がった問題点

さて、運営していくなかで浮かび上がった問題点を尋ねたところ、「特にはない」とのことであった。「町づくりは結果ではなく、過程だから、おもしろがってやっているそのプロセスが大事。結果はどうでもいい」とのことであった。「やりたいことを提案した人がまずはリーダーになるが、目的を設置している訳ではないので失敗もない」。むしろ「大きな目的を持ってしまうと縛られる」とのことであった。そもそも「今は変化が早く目的は意味をなさない」。例えば「歴史を立ち上げて、歴史が好きな人しかやってこない」という。

地域の紐帯が強まったか否かとの問いに対しても、「すべてがプロジェクト主義だから、強まったかどうかは分からない」。ただ「寺は利害を離れたところにある存在だから、コミュニティの中心になれる」とのことであった。

平野の場合は、「イベントに参加した人全員が会員である」という。「会長はいなくても、それぞれがプロジェクトの長になっている」。「しかし、つなぎ役は必要で、それが事務局になっている。だから、キーパーソンは必要」とのことであった。「しかし、それは団体の長ではダメで、それからいかに離れるかである」という。さらに、「強烈な個性のキーパーソンだと入りづらく、誰でも入れることが大切」とあるという。

実施範囲としては1キロ四方の平野郷が限界であるという。「チラシ60枚を違法で貼れるくらいの範囲」という。「町内会が圧力団体に回らないよう、うまく距離を取ってやっている」という。「町づくりで難しいのは、町内会との距離である」。「経験上、議員と町内会が入るとアカン」という。「両者は結びついている故に、余計にやりにくい」とのことであった。

### ④ 地域の評価

上述したように、「地元の人に町を知ってもらうのは、人を呼ぶことよりも難し」く、町の歴史を知ってもらうには、「歴史を知るためのシンポジウムよりも、歴史発見ラリー

のように、町を歩かせるのが良い」という。「正直言って、歴史を知るためのシンポジウムに住民はあまり関心を抱いていない」。

また、「PRには、費用は使っていない」とのことであった。なぜなら、「NHKなど、マスコミが勝手にやってくれるからである」という。「住民主体の動きだから、マスコミが飛び付く」のだそうである。「こちらから売り込むとダメ」であるという。

それでも、遠隔地から来る人は「1つのことしか知らない。途中のことは知らない。だから、まちかど博物館は、核となる観光資源に引きずられる可能性がある」と効果が発揮されないことを危惧する。

## ⑤ 小活

いずれにしても、勢いのある博物館である印象を受けた。しかしながら、大阪平野の場合は、そのエリアが相対的に富裕層の住む地域であったことから、最初から「観光振興」ではなく、「自分たちが楽しむこと」にその主眼を置くことができている印象を受けた。その経済的余裕、暮らし向きの良さから、自分たちが楽しむための町づくりの1つとして博物館を位置づけていた。

## 結論

以上、これまで三重県のいなべ市と津市、さらには大阪は平野という3カ所の先進地を見て回ったが、そこで我々が認識し得たことは、いずれの地域においても、まちかど博物館が観光ではなく、地域振興として使われていたという事実である。

まず、三重県の場合は、その当初こそ、まちかど博物館を観光振興のひとつのツールとして位置づけていたが、観光振興の核となるその他施設やサービスがその周辺になかったことから、観光振興のツールとはなりえておらず、専ら地域振興、館長への生き甲斐形成にしかなりえていなかった。その意味で、設立当初の目的とのズレが見られた。

大阪の場合は、そのエリアが相対的に富裕層の住む地域であったことから、最初から観光振興は念頭に置いておらず、自分たちが楽しむことにその主眼が置かれていた。住民自らマップを作り、ガイド役をこなす。自分たちが楽しむための町づくりのひとつとして博物館を位置づけていた。それ故に、始めるのも止めるのも内容も自由であった。むしろ観光化すると仕掛けが見えるからダメとのスタンスに立ち、観光化も経済効果も狙っていないのが平野であった。

しかしながら、両先進地とも、まちかど博物館を、当該住民が自らの町を再確認する重要なツールに位置づけ、見られることによる誇りの醸成とともに、地域住民に大きな生き甲斐ややりがいを与え、また子どもにあっては、新たな学習の場になるなど、まちかど博物館は新たな教育機会の創出となって現れ、総じて、地域活性化の推進力となりえるものであった。それは地域を明るくし、子供たちに、地域を学ばせ、仕事を学ばせ、そして人を学ばせるものであった。その理論的可能性として、それは伝統的な仕事や技術を継承させる可能性を秘めている。

そうして地域が活性化すれば、その地域の賑わいから、必ずや地域内外の人の目を引きつけようし、また、あるまちかど博物館それ自体が、既存の観光施設やサービスと上手く

絡まれば、地域の魅力は一段と厚くなり、それは更なる交流人口を導き、地域それ自体の底上げを果たそう。

すなわち、その施設がまちかど博物館であることを示す統一看板の作成やモデルルート、さらには魅力的なパンフレットの作成など、博物館それ自体の内容の充実と併せ、視角に訴えるいくつかのツールを作成しなければならないが、まちかど博物館がまるごと博物館郷のなかに上手く落とし込まれ、そのサテライトとして上手く機能すれば、それが地域の魅力を一段と高め、街を歩く楽しみを創出するものであるが故に、観光客をして地域に滞留する時間を大幅に高め、空腹を満たすに必要な飲食や土産など、地域にお金を落とす絶好の機会に繋がるということである。点であった観光を線から面へと広げる可能性を秘めているということである。

当然、そこで形成された交流人口の増加は、所得獲得のさらなる機会を当該住民に与えるだけでなく、新たなビジネスをも興させるきっかけとなり、それは当該住民にとっての新たな就業先となるばかりか、そうして形成された新たな就業先、新店舗は、当該住民に新たなサービスの提供元となって現れよう。それは地域経済の活性化に正の効果を与えるのである。まちかど博物館そのものも、それは商品を購入しなくとも入店しえる機会を観光客に与えるものであるだけに、入店させる1つの仕組みとして機能し、それ自体、個別商店にとっては、利益創出に繋がる性格を有していた。ひとつのビジネスチャンスをそこに形成するということである。当該住民にしても、外の目に晒されることによって、その輝きを一段と増す機会が与えられよう。

そして、それ以上に、そうした当該地域の活性化から所得の安定がもたらされれば、当該住民の都市部への流出をいくらかなりとも押し止め、反対に定着ならびに帰村人口の増大をもたらすことができるかもしれない。またそこに市町村の努力が重なれば、その可能性は一段と高まろう。それは技能伝承を促すひとつの契機となる。まちかど博物館は、それが所得の安定と繋がれば、後継者の育成にも繋がる可能性を秘めているということである。また、そうしてできた定着人口の増大は、国家、さらには地球規模での懸案事項である地域・環境保全力を確保することにつながり、いわんやその増大をもたらすかもしれない。

現実的な問題としても、博物館の設置に伴い、館長会が結成されれば、三重県の津市で見られたように、昔のサークル活動のような懐かしさを覚えさせ、ひとつの楽しみを創出するだけでなく、それがなければ絶対に知り得なかったような人との出会いは、新たな技能獲得の良い機会となり、自らのモチベーションのアップに正の効果をもたらそう。それは自らの技能の向上に繋がるなど、高いメリットとなって現れていた。

また、津市にあったように、まちかど博物館は、個々人の顔を鮮明にするものであるが故に、当該住民の紐帯を強める良い機会となり得ていた。地域住民の関係を密にするそれは、紐帯強化による地域の安全性も確保するのである。

そればかりか、まちかど博物館は、地域住民に生き甲斐ややり甲斐、さらには見られることによる誇りの醸成と人生への確信を提供するものであるが故に、当該住民の健康の増進に正の効果을及ぼし、厚生行政に1つの光明を与えるものと思われる。それは観光振興のみならず、高齢者対策としても位置づけられるということである。先進地の事例調査は筆者にそれを強く感じさせた。

当然、それが都市住民にとっての非日常、すなわち都市住民が普段手に入れられないものを提供しうるのであれば、感動を喚起させるだけでなく、それに伴う癒しやくつろぎの効果を与えることになり、それは都市住民にとって高い魅力となって現れよう。それは生き方の再考、人間らしさの発見に繋がるかもしれない。そのためには、まちかど博物館の持つべき内容もまたあらためて問われることになる。

内容としては、仕掛けが見えるような観光化ではなく、いみじくも三重県のいなべ市や津市で明らかにされた本物志向であるという教訓、さらには大阪・平野で見たように、光を見せる観光ではなく、歴史・文化、人とのつながり、音・匂い、雰囲気という重層空間の上に醸し出される「感風」を感じさせるということ、いうなれば、年月の積み重ねによって醸し出された目に見えないものが重要とのことであった。この歴史的なものを入れることの重要性は三重県でも指摘されていたことである。都会とはその位相が異なる地域の文化をあらためて認識することである。

人とのつながりということに関しては、いみじくも、着地型観光を唱導する識者がしばしば指摘するように、都市化、さらには近代化で失った人情をはじめとする人の温かさを伝えることが成功へのカギであり、地域興しのカギとなることが報告されている。これは明らかに人間関係の希薄化という現在の社会情勢の変化を受けてのものであるが、都市部、さらには近代社会が失いかけているものを中山間地域がいかに前面に打ち出せるかである。そこに成功のひとつのヒントが隠されている。

社会情勢の変化ということでは、観光それ自体が、価値観の多様化、個性化を受けて、団体旅行からグループ旅行、個人旅行へとシフトし、「周遊型から滞在型」へ、さらには「見るから体験へ」と移っていることを考え併せると、まちかど博物館は、まさに小さなマーケット、個人のマイブームに対応できるものであり、時代の要請にマッチしている。その大きな可能性を否定し得ない。レジャー、旅行のニーズは明らかに変化しているのである。体験型観光に人気が集まり、それを通して観光客は土地の人とふれあうことを求めている。

先に、ジュリアン・スチュワードの言葉を引き合いに出し、「文化とは集団の成員によって、後天的に学習され、成員によって共有され、世代を通して継承される行動様式と価値観」という見解を紹介したが、この文化とは人間が作りだしたもの故に、土地の人との交流があって初めて感じ取れるものなのである。内発的地域資源の活用という点でも、まちかど博物館は理にかなっている。

現在は、着地型観光が唱われ、ありのままの地域資源を活用し、旅行会社ではなく、地域のことを一番知っている地元の人が主導権を握り、地域主導で旅行商品を開発し、情報を発信することが求められているが、まちかど博物館は、まさに隠れた観光資源であり、穴場であり、その館長との交流を通して様々な楽しみ方を享受し得るものなのである。まちかど博物館は、着地型観光の目的である地域興し、町づくりに極めて有用なツールとなり得ている。素材は人であり、暮らしである。観光客が喜ぶことを前提にするのでなく、ありのままの暮らしを伝えることが重要なのである。文化、生業、経験、技を伝え、地域それ自体が旅の目的地になることに着地型観光の特徴はあるが、まちかど博物館はそれを見事に演出するものなのである。

現在、体験観光<sup>10)</sup>が唱われ、各所でその実践が見られるが、当たり前になっているから



こそ、ここでは本物にこだわる必要があると言われる。本物を体験させることであるという。体験型観光にあっては、喜びだけでなく、それに至る苦労も体験させることであるという。難しいからこそ、時間がかかるからこそ、達成感が生まれ、交流が生まれるのである。あくまでその主役は来訪者なのである。来訪者には、可能な限りすべての作業を行うことが求められている。だからこそ、それは宿泊を前提とするのである。やさしい、すぐできる、便利、近代的、安全、その対極にあるのが本物体験のキーワードであり、不便、原始的、危険が、難しい、時間がかかると合い並ぶキーワードである。体験は目的ではなく、あくまで手段なのである。内容のあるもの、心を高めてくれたものに人はお金を払うのである。だからこそ、体験型観光にあっては、地域主導で満足度の高い商品を創造することが必要なのである。この着地型観光とまちかど博物館とは、多くの点でその内容が重なっている。むしろその具現と言っても過言ではない。体験型観光から学ぶものは、体験ではなく、人である。観光の原点はやはり人なのである。まちかど博物館を推進する意義もここにあるのである。

だからこそ、館長の魅力やその熱意がそこに重なれば、博物館は面白いものになるのである。博物館のおもしろさは館長のおもしろさであることは、先進地調査が示すところであった。むしろ、まちかど博物館は、館長の生きがい、生き様の展示ともいえるものであった。その熱意のないところにそれは成立しないのである。熱意はいうまでもなく自発的意志の反映であり、まちかど博物館はこれを担保にするのである。「自発的にやっていないとすぐに伝わる」、「頼まれてやっていると、それが態度に出てしまう」ということは、先進地が示した教訓であった。地域を活性化するに当たっては、人の温かさが最大の商品になるのである。だからこそ、おもてなしの心、ホスピタリティがその成否の鍵を握るのである。川根本町で実施されたフォーラムで基調講演をされた田淵氏がおもしろいことを言っていた。地域住民を「その気」にさせ、「やる気」にし、「本気」にさせれば、地域は「元気」になるとのことである<sup>11)</sup>。活気は元気から生まれるということであった。

いうまでもなく、観光振興のキーワードは、非日常であり、驚きや感動をその内容とする。しかし現在では、人の温かさや絆、さらには家庭までをも不足するものとして、非日常に位置づけられるのかもしれない。人がふるさとを郷愁するのも、それは家庭の変容と無関係ではなく、自然に包まれないというのも、それが今では満たされる機会がなくなったことによる。これらマーケットニーズのキーワードは、中山間地域に今なお存在するものである。あらためて中山間地域からの発信が望まれるところである。

今のところ、まちかど博物館は観光資源や観光施設、さらには観光サービスの周辺に位置する点としての位置づけにすぎないが、今後はそのさらなる拡充を目指し、点である既存の施設と上手く絡み合わせることで、点から線、線から面への展開が望まれるところである。当然、豊かな内容もそれに与えなければならない。当面は、既存の博物館と共に、まちかど博物館の魅力を十二分に引き出すルート作成やガイドブック、さらにはまちかど博物館とイベントとを連動させることによって、まずはその存在を地域内外に周知させ、入館を容易にする仕組み作りを展開することである。その先に待つのが、驚きであり、感動であり、地域の人との暖かみ溢れる触れ合いである。大井川流域まちかど博物館は、大井川流域を活性化させ、中山間地域に特徴的な負の連鎖を断ち切ることができるであろうか。筆者はその先進事例となることを強く期待して止まない。

注

- 1) <http://www.kiryu.co.jp/machikado/>
- 2) 『静岡新聞』2009年6月10日「社説」参照。
- 3) 中山間地地域の現状に関しては、拙稿「中山間地域活性化の視点」『静岡産業大学情報学部研究紀要 第11号』、2009年、35－54頁に詳しい。
- 4) 『比較文明の社会学』放送大学教育振興会、1997年、12－14頁。
- 5) <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/matikado>
- 6) <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/matikado/asp/mannaka.asp>
- 7) <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/matikado/asp/inabe.asp>
- 8) 筆者は同委員会の委員長を務めるものであるが、同委員会は、2009年8月20日をもって、まちかど博物館推進委員会に発展的に解消している。同推進委員会の委員長も筆者が務める。
- 9) 村松氏曰く、「しっかいとは、アフターケアを含めて、悉く面倒を見よとの意」。
- 10) 田淵正人「着地型観光が地域を変える」『大井川流域まちかど博物館フォーラム』平成21年2月21日、川根文化センターチャリム21にて実施。本稿の着地型観光に関する記述は、そこでの講演を参考にしたものである。
- 11) 同上。